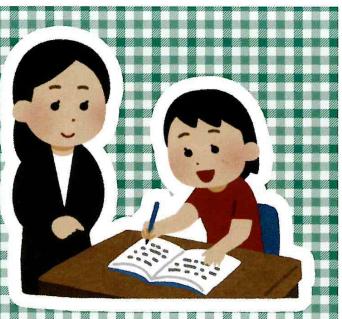
三北高 真澄新聞

発行所
静岡県三島市文教町1-3-18
県立三島北高等学校新聞部
編集発行　責任　新聞部
印刷所
大和印刷株式会社
TEL 055-965-4100

教員の働き方改革

～教員の未来を探る～



近年、教員の多忙な働き方が社会問題となっている。過労死ラインを越える長時間労働。それに伴う離職や休職の増加による人手不足、教員採用試験倍率の低下。私たち高校生が身近に接する教員に、今何が起きているのだろうか。

三北の働き方に迫る！

三北ではどのように働き方改革が行われているのか。私たちは、三北の改革を担う副校長先生に取材を行った。

―現在、三北で行っている働き方改革について教えてください。

働き方改革は主に3種類あります。1つはキャップ型で、定時退勤日を設けるなど勤務時間の上限を設けます。2つはカット型で、業務を削減します。3つは効率型で、情報共有のためマニュアル作りや、仕事をしやすくするために職員室座席の配置を変えたりしています。近年は、採点を始めとした様々な業務にICTを導入し、さらなる効率化を目指しています。そして三北では、2学期より定時退勤日を設けています。先生方は部活や講習の指導があり、忙しい日は人それぞれなので、自分に合う曜日を決めてもら い、意識して早めに帰ってもらうようにしています。しかし、最近は「帰れ帰れハラスメント」という言葉が出始めており、早く帰らなければいけないと意識することが逆に教員にストレスを与えることもあるようです。そのためこれらの両立が今後の課題だと思っています。

―今後、県として行おうとしていることはありますか。

今よりもさらに、教員と事務員や、先生がやる必要のない仕事は他の人にやってもらうという文部科学省からの指示に準じて、教員と事務員の役割分担などです。他にも、県内全ての特別支援学校で学校連絡・情報共有サービスを導入したり、中学校で休日の部活動を段階的に地域移行したりしています。ただ、教員の仕事に対するやりがいの数値は年々減少傾向にあり、また高校の教員は時間外労働が増加しています。

―これから実施しようと考えていることを教えて下さい。

1学期に既に業務の改革について、どうするべきかを先生方に投げかけています。それを考えながら仕事をしてもらい、今後アンケートを通じて業務内容や仕事の分担についての意見の聴取を行っていきたいと思っています。他にも、来年度からは採点支援システムを導入し、採点業務の削減を図ろうと考えています。仕事をしやすい環境を目指し、先生方が誇れるような職場になるよう努めます。

静岡県教委の取り組み

三島北高校は県のどのようなプランに基づいて働き方改革を行っているのか。それを探るべく、静岡県教育委員会・教育DX課の大澤篤さん、相原直人さんにお話を伺った。

―現在、静岡県はどのような教員の働き方改革を行っていますか？また、その現状を教えてください。

初めに、令和4年度から、「元気で魅力あふれる教職員の手で、夢いっぱいの学校にするため、『教育の質の向上』と『教職員の心身の健康の保持増進』を目指す」という目的に基づき働き方改革を行っています。重点的に取り組んでいることとして、「人的資源の配置・活用」があります。これは、県立学校のICT活用の支援や、先生がやる必要のない仕事は他の人にやってもらうという文部科学省からの指示に準じて、教員と事務員の役割分担などです。他にも、県内全ての特別支援学校で学校連絡・情報共有サービスを導入したり、中学校で休日の部活動を段階的に地域移行したりしています。ただ、教員の仕事に対するやりがいの数値は年々減少傾向にあり、また高校の教員は時間外労働が増加しています。

―今後、県として行おうとしていることはありますか。

今よりもさらに、教員と事務員で役割を分けていきたいと考えています。教員の仕事の一部を事務員が受け持つことで、教員の負担を減らし、児童生徒と向き合う時間を増やします。「時間・心のすきまをつくる」ことを目指します。また、すべてを中央集約化すれば良いわけではありません。例えば学校の備品やフェンスの破損といった事柄は、各々の学校で処理を行う方がスムーズに対応できます。このように、どこまでが学校、どこまでを中央本部で対応していくか。この線引きを今我々は行っています。目的を達成するための小ゴールを立て、それを実行して目標達成を目指したいと思います。

◀DX課の大澤さんと相原さん

声を上げた高校生

日本の若者の意見を集約し、政党・政府に対して、政策や提言をする一般社団法人日本若者協議会という団体がある。そこに所属する、東京都立晴海総合高校に通う高校2年生、秀島知永子さんに取材を行った。秀島さんは、「日本の未来のために、教員の労働環境の改善をしてほしい」という考えを自ら上げ、署名活動を行い、記者会見を開いた。

―署名活動、記者会見を行ったきっかけは何ですか？

私は教員の労働環境が大変であることを感じていて、大きな問題であると考えていました。そこで、私は教員と身近な存在である高校生として声を上げるべきだと考え、日本若者協議会の方と連絡を取り、署名活動を始めました。結果、署名が多く集まったので、都庁で記者会見を行いました。

―署名活動する上で、苦労したことはありますか？

ネットによる署名のため、私が行ったのは、署名を呼びかける文章を作成することでした。作成した文章を、署名サイトに投稿したところ、SNSで広がり、署名数が伸びたので、さほど苦労したようには感じていませんでした。しかし、文章を作成する時、多くの人が思っていることを踏まえた上で、私個人の意見にならないように様々な情報を調べるようにしました。

―署名により目指している理想とは何ですか？

教員に限らず、全ての職業の人が、ワークライフバランスを保ち、仕事と家庭、趣味を両立し、幸せな人生を送れるような社会になってほしいと思います。しかしそれを、実践するのは、なかなか難しいと思うのが現状です。

―最後に本校の生徒に、同じ高校生として伝えたいことを教えてください。

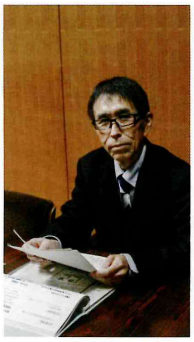
私は東京都に住んでいるので、国会議事堂等、地理的な理由で政治を身近に感じることができます。東京都以外に住んでいる高校生は、政治を身近に感じる機会が少ないのかもしれませんが、日本全国の高校生が、より良い社会を作り上げていくために、より政治に関心を持ち、アクションを起こしてほしいと思います。

▶現在高校2年生の秀島知永子さん

まとめ

普段教員と接している私たち高校生にも、決して無関係ではない教員の働き方改革。今回は様々な立場の方々に取材を行った。三北では一人ひとりに応じた定時退勤日を決めるなど、働きやすい環境を目指し、教育委員会ではいかに教員の負担を最小限にできるかを考案している。また、私たちと同年代の若者も教員の現状を変えるために世間に向けて声を上げている。取材を通じて、私たち三北生は、教員の長時間労働の問題を、自分事として考えることが必要だと感じた。この記事を読み、教員を取り巻く様々な諸問題を、身近に感じてもらえれば幸いだ。

▲新聞部の愉快な仲間たち



◀取材に応じてくださった副校長先生

1面 教員の働き方改革
2面 三北の謎
3面 AIと私たち
4面 特集記事

How Teachers In the Phillipins Works

日本は世界的に見て教員の労働時間が多い国である。そこで、グライサ先生にフィリピンの学校や教員の働き方についてお話を伺った。

―グライサ先生が働いていたフィリピンの学校について教えてください。

フィリピンは、中学校と日本の高校にあたるシニアハイスクールが一緒の敷地内にある場合が多く、私の働いていた学校もそうでした。一般的に、中学校には4年間、高校には2年間通います。また、私の働いていた学校はとても規模が大きく、生徒数はおよそ5000人で、教員だけでも300人近くいました。そのため職員室というものはなく、同じ教科ごとに教員の部屋が分かれており、全員でミーティングをするときはとても広いホールで行っていました。

―学校や教員の働き方はフィリピンと日本でどのような違いがありますか。

ひとつの大きな違いとして、日本では教員の時間割が3時間続けて割り当てられている場合がありますが、フィリピンでは教員の授業がより分散されています。また、日本の教員は8時間半勤務で、それに加えて放課後に補講や部活動があり、それを教員が監督、指導をしています。その ため、勤務時間外で割り当てられている労働が多い印象を受けます。一方で、フィリピンの教員は8時間勤務で、数字だけ見ると日本の教員とそこまで差はないように感じられますが、フィリピンには部活動がないため、教員は就業時間以外に労働を割り当てられません。

▶Ms. グライサ From フィリピン